慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	史的唯物論研究序説
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1930
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.24, No.11 (1930. 11) ,p.1745(43)- 1799(97)
JaLC DOI	10.14991/001.19301101-0043
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19301101-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

便宜とする。故にこゝではこれについて敢て論じないことにした。

（一九三〇年十月十四日稿）

史的唯物論研究序説

加田哲二

一

筆者は屢々他の機會において、社會學建設者としてのマルクスの意義を論じた。（註一）社會學建設者としてのマルクスは史的唯物論建設者としてのマルクスである。而して、史的唯物論の理論はマルクスの學問的生涯においては、比較的早く構成せられてゐたことは、既に、周知の事柄である。もし、吾々がマルクス主義なる言葉によつて、表現せらるゝマルクスの全理論を便宜上分類して見るとするならば、それは哲學、社會學、經濟學の三つの部分に分つことが出來やうと思ふ。而して、これらの三つの部分は、マルクス主義においては、不可分的なものであるけれども、その主要内容の發展の時期からいへば、哲學、社會學、經濟學の順序によつて發展構成

されたものと見て差支ないのである。（註二）こゝに哲學とは、その辨證法的唯物論を、社會學とは史的唯物論を意味するのである。マルクス主義をもつて「一の全世界觀」と見るものは、マルクス主義のかくの如き哲學的並に社會學的基礎との關聯においていふのである。（註三）この點について、プレハノフはいつてゐる。「マルクス主義は古希臘に於て、デモクリトスにより、又部分的には、其の先驅者たるイオニアの思想家たちにより、根柢を置かれた世界觀が現に到達せる最高の發達階段を示すところの近代的唯物論である。謂はゆる萬物有生論は一の素朴的唯物論に他ならぬ。而して、近代唯物論の建設につき最大の功勞を有するものは疑ひもなく、カアル・マルクス及びその友人フリードリッヒ・エンゲルスである。實に近代的唯物論の歷史的並びに經濟的方面は、その根柢においては、これらの兩人の業績である。謂はゆる史的唯物論及びそれと密接の關係ある――經濟學の任務、方法、範疇に關する、及び社會殊に資本主義的社會の經濟的發達に關する思想の一團は、殆んど皆彼等にその成立を負ふものである。」（註四）

註一　拙著、社會學概論、九四頁以下、拙稿「ドイチッヒ・イデオロギイとマルクス社會學」改造昭和四年十月號、前掲拙著增訂版所收。

註二　小泉教授もこの說を主張せらるゝやうである。「マルクシズム」岩波講座所載。

註三　Plechanoff, Grundprobleme des Marxismus. 恒藤恭譯、マルクス主義の根本問題一頁。

註四　マルクス主義の根本問題一――二頁。

かくの如きマルクス主義の全構成が認識されたのは比較的近時に屬する。この傾向はマルクス主義の地元たるドイツにおいてすらさうであつた。我が日本は今日マルクス研究において、世界において、ドイツ、ロシアについての重要性を有するところであると思はれるが、この傾向は著しいものがあつた。このことは、マルクス主義の全構成における研究を唱道し、唯物辨證法の重要性を主張した福本和夫氏の指摘するところである。（註五）

註五　福本和夫著、社會の構成並に變革の過程（大正十五年刊行）一――三一頁。

全世界觀としてのマルクス主義が日本において論議し始められたのは近年のことに屬する。それは主としてロシア共產主義の影響によるものである。現代日本のマルクス研究は一方においては、かくの如き全世界觀の理論と他方においてはこの唯物辨證法を基礎とする社會的變革の戰略論である。マルクス主義の

哲學的基礎は既にドイツにおいて、修正主義運動の勃興とともに論ぜられてゐる。而して、ロシアにおける修正主義の發展は、ロシア・マルクス主義者の中において、マルクス主義の哲學的理論家を輩出せしめるに至つた。それの主なるものは、プレハノフとレニンである。しかるに、一九一七年の勞農革命は革命における國家の問題――無產階級の獨裁の問題――をマルクス主義的文獻における主要問題たらしめたのである。この問題はレニンの「國家と革命」（一九一七年）に端を發して、ロシア共產主義者と第二インタナショナルのデモクラアトとの間の獨裁對民主主義の論戰となつた。勞農革命後の數年間は實にこの問題を中心として、マルクス理論は發展した。しかるに、勞農露國のソヴィエット政權の確立は、この獨裁問題を事實問題として解決した觀がある。而して、一新組織の確立は當然その說明または理論的基礎づけとしての理論を伴ふものである。この場合における理論がマルクス主義において求めらるべきことは當然の歸結でなければならぬ。

一新社會組織の理論的基礎づけは一の統一的理論たることを要する。何となれば、ある社會の統一的組織は、その理論的說明に對する統一を要請するからである。マルクシズムが一の統一的理論即ち一の全世界觀として主張せられながら、その體系的組織に達しないで、資本主義社會の批判として止まつてゐたことは、その理論的基礎づけを要請する社會的基礎――一の確固として組織された社會的基礎を缺いてゐたからである。しかるに、一九一七年及びその後のロシア革命並にその發展は、一の體系的理論を要求するまでに到達してゐたのである。マルクシズムの中に包含せられてゐて、まだ體系的組織的に秩序たてられなかつた理論は今や、統一的理論として要求されるに至つた。それは一新社會組織のヂァスチフィケェションとしての理論である。それは當然全世界觀として組織されねばならぬ。ロシア共產主義者の研究が世界觀としてのマルクシズムの構成に向つてゐることは、かくの如き客觀的情勢の結果であるといはねばならぬ。

日本におけるマルクシズム研究はこのロシアにおける研究の狀態を反映するとともに、日本の社會的情勢、即ち世界大戰による巨大なる資本の蓄積とその必然的行き詰りの狀態による社會的傾向によつて基礎づけられてゐる。我が國におけるマルクシズム研究はかくの如き客觀的情勢の一反映として、最近數年の間に

おいて、マルクシズムの全體系的哲學的研究が行はれてゐるのである。殊に最近におけるマルクシスト側における唯物辨證法の研究とマルクシズム批判者側におけるその批判は明瞭にこの情況を語るものでなくてはならぬ。（註六）

註六　我が國における唯物辨證法の論爭に關しては、井原紀著「我が國における唯物辨證法批判者の批判的諸點」（一九三〇年）を參照せよ。この書には、土田杏村、二木保幾、土方成美、小泉信三、藤井健二郎の諸氏のマルクス辨證法批判が要約されてゐる。我が國における唯物辨證法批判についての良要約を提供するものである。

筆者は今この全世界觀としてのマルクス主義について論じやうとは思はない。かゝる企圖は一の浩瀚なる著書を必要とするものであつて、かくの如き一小論文の企圖し及ばざるところである。筆者の問題とするところは、史的唯物論なるものが、一の社會學體系として成立する可能性を有するか否かの點であつて、而してこの點を多少觀察せんとするものである。

二

史的唯物論とは何か。

この問は今更ら發せらるべき問でもなければ、また今更ららしく答へらるべき必要を有するものでもない。たゞ吾々は次の議論への必要上これに答へなければならぬ。而して、これに對する回答はマルクス、エンゲルスが最もよく、これを與へてゐる。

エンゲルスはいふ。「唯物史觀は次の命題から出發する。即ち生產及びそれに次いでは、その生產物の交換が、一切の社會制度の基礎であること。歷史上に現はれた各社會における生產物の分配及びそれとともに、階級もしくは身分の社會的編成は、何が如何に生產せられ、そして如何にその生產物が交換されるかに依つて定まること。この故にあらゆる社會的變化および政治的革命の究竟原因は、人間の頭腦の中に求むべきでなく、即ち永劫の眞理および正義に對する人間の知見の增進に求むべきでなく實に生產方法および交換方法の變化に求むべきである。即ちこれをその當時の哲學に求むべきでなく、實に經濟に求むべきである。」（註七）マルクス、エンゲルスは既に一八四五年にその史的唯物論を確立して次のやうにいつてゐるのである。「この史觀はその基礎を次のところに置く、即ち現實的生產

過程を、しかも直接生活の物質的生産から出發して、これを發展せしめ、而して、この生産方法と關連して、且つこれによつて作られた交易形態を、即ちその種々な階段における市民的社會を全歴史の基礎と解し、この市民的社會を國家としての行爲において、叙述するとともに、種々の理論的産物、意識の諸形態、宗教、道德、哲學等の全部をこれから説明し、これらのものから生ずるその成立過程を追究することに存する。勿論この場合、事象はその全體において、（及び故にまたこの種々なる方面における相互に對する相互作用も）叙述せらるゝのである。この歴史觀はすべての時代において觀念史觀のやうに、一の範疇を求めることを必要とせず、常に現實の歴史的地盤の上に止まり、實踐を理念から説明しないで反つて理念の形成を物質的實踐から説明する。而して、これに應じて、次の如き結論に到達する。意識のすべての諸形態及び産物は、精神的批評によつて、『自意識』への解消、『妖怪』『幽靈』『狂氣』などへの轉形によつてではなく、この觀念論的饒舌のそれから發生する現實の社會的關係の實踐的革命によつて解消せられる。即ち歴史の、而して、また宗教、哲學、その他の理論の推進力は批評ではなくて革命である。」（註八）

註七　Engels, Entwicklung des Sozialismus. Kautskys Ausgabe. S. 35. マルクス＝エンゲルス全集、第十二卷五六四頁。

註八　Marx-Engels, Deutsche Ideologie I. Marx-Engels Archiv. I. S. 259.

而して、この史觀は一八五九年のマルクス「經濟學批判」の序文において、「一般的結論」とせられてゐる有名な文章となつて現はれてゐるのである。この文章は以上に、引用した文章をもつと精緻な形態において、綴つたものであつて、マルクスが「かくて、私の得たところの、そして一旦これを得た後は、私の研究の導きの絲となつたところのその一般的結論」といつたところのものである。（註九）このマルクスの「一般的結論」について、彼自身は次のやうにいつてゐる。「私を惱ました問題の解決のために企てた最初の勞作は、ヘエゲル法律哲學の批判的檢討であつて、その序論は一八四四年巴里で公にされた「獨佛年誌」に現はれた。私の研究は、法律關係及び國家形態は、それ自身によつて理解さるべきものでなく、また、所謂人間の精神の一般的發展によつて、理解されるものでもなく、寧ろそれは、物質的の生活關係――これが總和はヘエゲルが十八世紀における英佛人の先縱に倣うて、「市民的社會」なる名

稱の下に包括せしところのもの――にその根據を有するものだといふこと、しかもこの市民的社會の解剖的研究は、これを經濟學に求むべきものだといふことの結論に達した。」（註一〇）

註九　Marx, Zur Kritik der politischen Oekonomie. Vorwort.

註一〇　Marx. op. cit., Vorwort. 宮川實譯本三頁。

この史觀の根柢に存するものは、唯物辨證法である。しからば、先づ辨證法とは何であるか。吾々はこれを、エンゲルスの説明にきかふ。

「吾々が自然、もしくは、人間の歷史、もしくは、吾人自身の精神的の行動を考察して見るときに、吾々には先づ聯關及び交互作用の無限の錯綜――それにあつては、何物も性質、場所、狀態において、あるがまゝには存續しない、萬物は動き、變化し、生滅する――の映像が與へられる。この原始的な素朴な、しかし事物の性質上、正當な世界觀は、古代のギリシア哲學の觀方である。そして、始めて、ヘラクリットによつて、明瞭に言ひ表はされたのである。曰く、萬物は存在するし、また存在しない、何となれば、萬物は流轉するから、不斷の變轉、不斷の生滅の過程にあるからと。」（註一一）

註一一　Engels, Entwicklung des Sozialismus. S. 27. 經濟學批判會編「唯物辨證法」の譯文に從ふ。

しかるにエンゲルスに從へば、この見解は現象全般の一般的性質を正しく理解してゐるのであるが、これによつて、この全體が構成されてゐる個體を說明するには、不充分である。從つて、この個體を研究するためには、吾々はそれを全體との關聯から抽出して、それだけを、その因果關係その特性に從つて研究しなければならぬのである。しかるに、この研究は、古代ギリシアの自然科學または歷史的研究においては、全體的觀察に對して、從屬的地位にあつたのであるが、この個體のみを全體から分離して、考察する學問の發達となり、引いては、孤立的形式論理的研究にのみ沒頭する形而上學的な思惟方法を作り上げたのである。

「形而上學者にとつては、事物とその思惟における映像たる概念とは、孤立した個々別々に、しかも他と關係なしに考察せらるべき固定した確固たる永久不變の研究の對象である。彼は全然媒介されない兩極端において考へる。即ち彼の言葉は、然りは然り、否は否である、これより過ぐるは惡より出づるである。彼

にとつてはある事物は存在するか、さもなくは存在せぬかの何れかである、又同様にある事物が同時にそれ自身であるとともに、他のものであることは出來ない。積極と消極とは絶對的に排除し合ふ、同様に原因と結果も亦相互に不動の對立をなす。この考へ方は、所謂常識のそれであるといふ理由で、一見極めて尤もらしく思はれる。然し乍ら常識は、自ら作つた封鎖的な領域内においてこそ、尊敬すべき伴侶であるが、一歩探究の廣い世界に踏み出すや否や、全く驚くべき冒險を冒すこととなる。形而上學的の考へ方は、對象の性質に應じて、廣狹はあるが、可成廣い領域においては、是認せらるべきものであり、また必要ですらあるが然し早晩必ず一つの限界に衝き當る。それを超えると、それは一面的な狹隘な抽象的なものとなり、解くべからざる矛盾に迷ひ込む。蓋しそれは個々の事物に捉へられて、その聯關を、その存在に捉へられてその生滅を、その靜止に捉へられて、その運動を忘れ、畢竟に樹木を見て、森を見ないから。……すべての有機體は時々刻々同じものでなく、また同じものでない、それは時々刻々外部から攝取した物質を消化し、他の物質を排泄する、時々刻々その身體の細胞は死滅して新しい細胞が作られる、遅かれ早かれ、一定の時間の後には、その身體の物質は全く更新せられ、他の元素によつて更代される、それ故に全ての有機體は常に同じであり、而かも別物である。同様に我々は、より正確に觀察すると次の事實を見出す、即ちある對立の兩極、例へば積極と消極は、一方互に對立してゐると共に、他方互に分離することが出來ない關係にあり、あらゆるその對立にも拘らず、相互に流通し合ふといふこと、同様にまた原因及び結果は、孤立した個々の場合に適用する時にのみ、妥當性を有する表象であること、しかし、我々の個々の場合を世界全體と聯關せしめて、觀察するときには、原因と結果とは同一に歸し、結局原因と結果とは、絶えず、その地位を變へ、今あるひはこゝで結果であつたものがやがて或は其處では原因となり、遂にまた原因は結果となるといふ一般的の交互作用なる見地に歸着するといふことが知られる。……事物及びその概念的な映像を本質上、聯關において、運動において、その生滅において、把握する辨證法にとつては上述の如き現象は、みな辨證法自身の考へ方を確證するものである。自然は辨證法の證據である。……

全宇宙の發展及び人類の發展並びに、この發展の人間の頭腦における映像の精密な說明は、だから、辨證法的方法においてのみ、成就することが出來る。」（註一二）

註一二　Engels, op. cit., S. 28-30. 譯文同前。

辨證法的思惟方法が如何なるものであるかは、このエンゲルスの巧妙な說明によつて、大略了解することが出來る。この辨證法は、ドイツ古典哲學において、發展したものである。マルクス―エンゲルスはこの古典哲學から、その辨證法を繼承した。彼等が「ドイツ勞働者運動は實にドイツ古典哲學の繼承者である」（註一三）といつてゐるのは、辨證法的方法を古典哲學から繼承した意味に外ならぬのである。

註一三　Engels, Feuerbach und der Ausgang der klassischen Philosophie. (Marxistische Bibliothek Bd. III) S. 69.

三

マルクス―エンゲルスはドイツ古典哲學からその辨證法をそのまゝ繼承したものではない。彼等が自分の辨證法を唯物辨證法といふ所以はこゝにあるのである。マルクスはいふ。

「私の辨證法的方法は、單に根本において、ヘエゲル流のそれとは異なるのみでなく、また正反對のものである。ヘエゲルにとつては、思惟行程――彼は更らにこの行程を觀念と呼んで獨立の主體たらしめたのであるが――は現實的なるものの創造主であつて、現實はたゞ思惟行程の外部現象たるに過ぎぬ。これに反して、私の立場から見れば、觀念的なるものは畢竟するところ、人類の頭腦の內で變更され、飜譯された物質的なるものに外ならぬのである。

「ヘエゲル式辨證法の神祕的方面については、今を距ること殆んど三十年前、即ちヘエゲル辨證法が尙流行してゐた時代に、私はこれを批判した。然るに私が『資本論』第一卷を書いてゐた當時、今日敎化されたドイツにおいて巾を利かしてゐる所の、氣六づかしい、横柄な、凡庸な口眞似學者たちは、嘗てレッシングの時代に勇敢なるモゼス・メンデルスゾーンがスピノザを取扱つたのと同じ樣に『死んだ犬』としてヘエゲルを待遇することに滿足を感じてゐた。私が大思想家ヘエゲルの門人なりとみづから公言し、おまけに價値論を取扱つた章の此處彼處で、わざと彼れ獨特の口吻を弄んだ所以は茲にある。辨證法はヘエゲルの手で神祕化されたとはいへ、この事實は決して、ヘエゲルが辨證法の作用する一般的

形態を、包括的に且つ意識的に表現した最初の學者であることを妨げるものでない。辨證法はヘエゲルにおいて逆立してゐる。我々は神祕の外殼の内に合理的の核心を見出すため、この逆立ちした辨證法を更らに轉倒せしめねばならぬ。

「辨證法は神祕化された形態をもつて、ドイツの流行となつた。それは現存の事態に光明あらしむるものの如く見えたからである。反對に合理的の姿における辨證法は、ブルジョア及びその偏理的代辨者達にとつて、苦惱となり、恐怖となるものである。なぜならば、辨證法なるものは、現存事態に對する肯定的理解の中に、現存事態に對する否定的理解をも必然的消滅の理解をも含めてゐるからである。それは歴史的に生成した一切の形態をば、不斷流動しつゝあるものとして、經過的の方面から觀察し、何ものにも怖れることなく、本質において、批判的革命的たるが故である。」（註一四）

註一四　マルクス資本論第一卷第二版序文。

かくの如きマルクスの主張はデボーリンをして次のやうにいはしめてゐる。

「唯物辨證法は、歴史的並に、論理的には、直接にヘエゲル辨證法に接してゐる。そして後者がマルクス―エンゲルスによつて唯物論の基礎の上に加工された限りにおいては、唯物論的辨證法はそれの繼續であり、又それの爾後の發展である。辨證法は人類の思惟の全史の發展の結果であり、科學や哲學や人間の實踐的創造の最高の產物である。」（註一五）而して、ヘエゲルとマルクスの差異については次のやうにいつてゐるのである。「かくてマルクスの方法は二つの關係においてヘエゲルの方法とは異つてゐる。第一にマルクスの方法は、その出發點、その認識論的根據（思惟と存在の相互關係の問題を解決する意味においての）の點から見て、また世界觀一般の點からみて、ヘエゲルのものとは異つてゐる。第二に、――このことも同樣に重大な意義をもつてゐるのであるが――マルクスの方法は具體的なものと抽象的なもの、物質的なものと形式的なものとの關係の問題を別樣に解決したといふ意味において、ヘエゲルの方法に對立してゐる。このことはマルクスの唯物論的世界觀一般に直接の關係がある。マルクスがヘエゲル辨證法の神祕的並びに神祕化的形式として理解してゐるものは、ヘエゲルにおいては幻想、論理的圖式

の形式を取つた眞の具體的なものとして現出してゐる。このためにマルクスは何よりも先づ神祕的形式の背後に合理的形式すなはち抽象的幻想の現實的內容を發き立てることに當面したのである。」（註一六）「ヘエゲル論理學に對するマルクスの批判は形式主義及び抽象的思惟に對する批判として行はれた。マルクスはヘエゲルの抽象的論理學に具體的且つ實質的な論理學を對置してゐる。この點にマルクス辨證法とヘエゲル辨證法の根本的差異がある。マルクスはヘエゲルを繼續し、辨證法の發展を完成させたが、すでにそれは新らしい基礎において行はれてゐるのである。」（註一七）

註一五　デボーリン著、辨證法――ヘエゲル「論理學」批判――一〇頁。

註一六　デボーリン、前揭書四八――四九頁。

註一七　デボーリン、前揭書五三頁、なほヘエゲルについては、デボーリン、前揭書の外、プレハーフ「ヘエゲル批判」川內唯彥譯、レニン著「ヘーゲル論理の科學大綱」川內唯彥譯、雜誌「理想」ヘエゲル研究號、昭和四年四月、雜誌「理想」昭和四年十月辨證法研究號を參照せられたし。

四

辨證法は「凡ゆる運動の最も普遍的な法則の學」であり、「自然及び人間歷史における運動に對しても、思惟の運動に對しても均しく妥當性を持たねばならぬ。」即ち辨證法は自然歷史及び思惟の三領域に對してその妥當性を持つてゐるとエンゲルスはいふのである。（註一八）

註一八　エンゲルス、反デューリング論への註、同遺稿、自然辨證法上卷、加藤正、加古祐二郎譯（岩波文庫）二一七頁。

世界觀としてのマルクス主義はその必然的結果として、自然、歷史及び思惟の三領域に關する體系が樹立されなければならなかつたのである。その結果、マルクス――エンゲルスは自然科學にその注意を向けなければならなかつた。彼等は、自然科學の重要性を初めから認識してゐた。マルクスはその初期の著作において「批判的批判は人間の自然に對する理論的、實踐的行爲、即ち自然科學と產業とを歷史の運動から除外しておきながら、歷史的現實の認識において、その端初にだけでも到達したと考へてゐるのだらうか。あるひはまた、例へばいづれかの時代の產業、即ち生の直接的生產方法をさへ認識しないで置いて、その時代を實際認識した

とでもいふのだらうか。」（註一九）といつてゐる。

（註一九）Marx-Engels, Heilige Familie, Aus dem literarischen Nachlass II. Ss. 259-260. マルクス―エンゲルス、神聖家族、マルクス―エンゲルス全集、第一卷六七六――六七七頁。

しかるにマルクスは、歴史的科學の構成に忙はしくして、自然科學の研究にまで到達することは出來なかつた。これに對して、エンゲルスは自然科學に對する若干の考察をしてゐる。それは自然科學の方法としての辨證法についてである。エンゲルスは自然科學の當時の狀態について次のやうにいつてゐる。「經驗的自然科學は、尨大な多量の實證的な認識材料を集積した。そこで必然的にかゝる材料を凡ゆる個々の研究領域において、系統的に、且つ內部的關聯に應じて、整理しなければならないことは全くいなみ難いことゝなつてゐる。これと同じく個々の認識領域を相互に正しい關係に立たしめることもまたいなみ難くなつてゐる。しかしながら、これとともに自然科學は理論の領域に進むことになるのである。そしてこゝでは經驗的方法は用をなさない、たゞ理論的思惟のみが役立ち得る。しかしながらこの理論的思惟は素質として見た場合にのみ一の生得的な特性であるに過ぎない。かゝる素質は開發され、訓練されねばならない。そしてかゝる訓練には今迄のところでは從來の哲學の研究以外にいかなる手段もないのである。」（註二〇）この經驗的自然科學を救ふものは、辨證法である。「自然科學の辨證法――對象は運動する物質。物質の種々な形態や種類自體は、また運動を通じてのみ認識することができる、運動においてのみ、物體の性質は現はれる、運動しない物體については、論ずべき限りではない。それ故、運動の形態からその運動物體の性質がでてくる。」（註二一）かくの如く論斷する理由は、「所謂客觀的辨證法は自然全體に亘つて行はれてゐる、そして所謂主觀的辨證法、即ち辨證法的思惟は、自然のあらゆる部分を貫いてゐる運動――絕えず衝突し竟ひに相互の中へ、または一層高い形態へ流入し、かくてまさしく自然の活力の條件をなすところの諸對立をなして進行する運動――の反映に過ぎない。引力と斥力と。磁氣においても兩極が生ずる、それは同一の物體に現はれる。電氣においては、兩極は相互に張力を及ぼし合ふ二個または、二個以上の物體に配當せしめられる。あらゆる化學的過程は化學的吸引および反撥の過程にすぎない。最後に有機的生命においては、細胞核の

形成は、同樣に生ける蛋白質の分極作用と見做すことが出來る」からである。（註二二）故に「まさにこの辨證法こそ、今日の自然科學にとつて最も正しい思惟形式なのである。なぜならば、辨證法のみが獨り自然の中に行はれる進化の諸過程に對して、總括的全體的な諸聯關に對して一つの研究領域から他の夫れへの移り行きに對して、類推を、從つて說明方法を提供するからである。」（註二三）

註二〇　エンゲルス、自然辨證法、二〇六頁。
註二一　エンゲルス、自然辨證法、八一頁。
註二二　エンゲルス、自然辨證法、一四〇頁。
註二三　エンゲルス、自然辨證法、二〇七頁。

デボーリンによれば、自然科學と哲學との結合は、唯物論的辨證法に基くとき始めて實現され得るのである。「現代の自然科學はエンゲルス及びレーニンによつて豫言された新らしい發展の時代にすでに這入つてゐるやうに思はれる。偉大な自然研究者は、科學の發展行程そのものによつて、科學を理論的に究明することを余儀なくされてゐるかぎり、辨證法の見地に推移してゐるのである。若しくは、推移し始めてゐるのである。現代の科學が『混亂激動』の時期を經驗してゐることは疑ひのないことである。恐らく吾々は現代科學の建築物全體のある建直しに直面してゐるのであらう。だからして多くの自然科學者が何れかの科學部門の中に蓄積された諸矛盾を理論的に究明し得ずに、觀念論に飛躍し、甚だしきは神祕主義に飛躍してゐるのは、敢えて驚くに足らない。舊い形式論理學は、これらの諸矛盾を克服することにとつて、不充分なものとなつてゐる。それは辨證法的論理學によつて取り替へられなければならぬ。」（註二四）

註二四　デボーリン、辨證法、一一―一二頁。

かくの如き辨證法は自然科學の領域において、今日所期の成功を收めたであらうか。これに對して、自然科學的知識の不充分な吾々はこれを批判することは出來ぬ。しかしながら、デボーリンの如きも、それをまだ斷言すが如き狀態に達しないことを認めてゐる。曰く「辨證法的方法はマルクスのおかげで社會科學の領域に變革をもたらす可能性を與へたとしても、自然科學については、まだまださうとは云へないのである。自然科學の領域では『傳統』の力が餘りにも大きいので、形而上學的思惟方法の偏見をやすやすと克服することは出來ない。しかしながら、

この領域においても、辨證法の適用を不可避的に必要とさせるやうな過程が行はれてゐる。すべての問題は自然研究者たちが、自分等の領域に對する辨證法の巨大な科學的意義をまだ今のところ意識してゐない點にある。エンゲルスの『自然辨證法』はまだ自然研究者の側から當然の承認を受けてゐない。しかし吾々はこの方面には將來必然的な轉機が起るものと考へねばならぬ。」（註二五）

この方面における顯著な研究は現はれつゝある。デボーリン、ストリヤーロフの研究の如きはその一例であるといへる。（註二六）しかしながら、吾々はこの方面に直接關係を有するのではない。吾々の關心は、史的唯物論そのものにある。

註二五　デボーリン、辨證法、二一一——二一二頁。

註二六　デボーリン、辨證法と自然科學、上下二册、笹川正孝譯、ストリヤーロフ、機械論と辨證法的唯物論　笹川正孝譯を見よ。

五

史的唯物論の概觀については、既に、第二節にこれを說明した。それは、既に述べたやうに歷史的現象に對する辨證法である。マルクスは、資本論第一卷に對するベテルスブルクの「キエストニーク・エウローブイ誌」の批判からその方法論的部分を擧げて、自分の方法を說明してゐる。

「マルクスにとつては、研究の對象たる諸現象の法則を發見するといふ一點のみが重要であつた。而も、彼にとつて重要となつたのは、此等の現象が一の完成された形態を有し、且つ與へられたる歷史的期間の範圍內に見られる如き相互聯絡を保つ限りにおいて、支配を受けるところの法則だけではない。更らに、此等の現象の變化、これらの現象の發達の法則、即ち一の形態から他の形態への一組の相互聯絡から他の一組の相互聯絡關係への經過こそ、彼にとつては、何より も先づ第一に重要な問題なのである。彼れは、一度びこの法則を發見するや否や、それが社會的生活のうちに結果となつて現はれるところのものを仔細に研究する。……隨つてマルクスは左の一事についてのみ努力することになる。それは、即ち嚴密なる科學的研究によつて、社會的事情の特定的秩序の必然性を論證し、出來得る限り、公平に彼れの研究の起點たり、支持點たるべき事實を確定するといふことである。それには、現在における秩序の必然性と同時に、この秩

序が不可避的に移り行くべき他の秩序の必然性をも、論證すれば十分であつて、斯かる必然性を人類が信ずるか否か、意識してゐるか否かといふことは、敢えて問ふ所でないのである。マルクスは社會的の運動を以て單に人類の意志、意識及び意向から獨立するといふのみでなく、寧ろ人類の欲求、意識及び意向を決定する所の法則によつて、支配される自然史的の一行程なりとしてゐる。……意識的の要素が文化史上斯く從屬的の役目を演ずるに過ぎぬとすれば、文化それ自體を對象とする所の批判的研究において、殊に意識の何等かの形態又は結果を研究の基礎とし得ざることは自明の事實である。即ちこの批判的研究の起點たり得るものは、觀念ではなく、外部的の現象のみである。斯かる批判的研究の任務は一の事實を觀念に對してでなく、他の事實に對して、比較對照することに限られるであらう。この研究にとつて重要なことは、甲乙二個の事實をば、出來得る限り嚴密に檢覈し、甲が乙に對して、事實上同一進化の相異つた要素となつてゐることを發見する。殊に最も重要なことは、各秩序の順序を斯かる進化の各段階が依つて現はるところの前後の順序及び聯絡を、更らに劣るところなく嚴密に究明するといふ一事である。しかしながら人或は言ふであらう。經濟生活上の普遍律なるものは、それが現在に應用されると過去に應用されることを問はず、すべて同一のものであると。これこそ、マルクスが否認せんとするところのものである。マルクスによれば、かゝる抽象的の法則は存在して居らぬのである。……彼れによれば、寧ろ反對に、歴史的の各時代はそれ自身の法則を有してゐる。……人類の生活なるものは、一定の發達期を越えるや否や、即ち一の段階から他の段階に進み入るや、從來におけると異つた法則によつて支配され始める。……舊來の經濟學者が經濟上の法則をば、物理化學上の法則に擬したことは、これ取りも直さず、經濟法則の性質を全く誤解したものである。現象をより深く分析することによつて、社會的の各有機體が――動植物有機體におけると同じく――根本的に相區別されるものであることが知られる。……しかのみならず、各有機體はその全構造を異にし、個々の器官も相一致することなく、斯かる器官の作用する條件も亦異つてゐる爲めに、同一の現象も全く相異つた法則の支配を受けるやうになるのである。」（註二七）

註二七　マルクス、資本論、第一卷第二版序文。

かくの如き辨證法的方法――唯物辨證法的方法はマルクスをして如何なる出發點を採らしめたか。彼がヘエゲル辨證法の逆立ちを主張したのは、それがその基礎を物質に置かないで、精神に置いたが故である。マルクスはこれを脚の上に立たしめたのである。物質が彼の出發點である。社會の歷史的考察についても、この見地を離れるものではない。エンゲルスはいふ。「ダアウィンが有機的自然の發展の法則を發見した如く、マルクスは、人間の歷史の發展法則を發見した。この法則とは、從來過度の觀念的繁茂の下に蔽はれてゐた次の簡單なる事實である。即ち、人類及政治、科學、藝術、宗教等の生活を營み得る前に何よりも先づ食べ、飲み、住み、着なければならぬ。從つて、直接の物質的生活資料の生產が、それ故にある民族、ある時代のその時々の經濟的發達階段が、當該人類の國家制度、法律思想、藝術並に宗教的觀念をすら發達せしめた基礎であり、從つてこれらのものは、この基礎より說明するを要し、從來行はれた如くその逆であつてはならぬといふ事實がそれである。」（註二八）

註二八　エンゲルス、マルクス送葬の辭（一八八三年）マルクス――エンゲルス全集第十二卷六六九頁。

この根本的見地は、マルクスが「共產黨宣言」「經濟學批判」また「資本論」に至つて、始めて、獲得されたのではない。既に引用した「神聖家族」の一節は、既にマルクスがこの當時、この根本的立場に近づいてゐたことを示す好箇の文章である。この立場は、一八四五年執筆の「ドイチッエ・イデオロギイ」において、完成された形態において現はれてゐる。

この著作において、マルクスの出發點を形成するものは、一の現實的前提であつて、何等の恣意的、獨斷的前提ではない。「それは現實の個人と、その行動と傳來的並に自己の行動によつて作られた、その物質的生存條件である。從つてその前提は、純粹な經驗的方法によつて確認し得るのである。故にすべての人類史の第一前提は、勿論生ける個人の生存である。而して最初に確認せらるべき部分は、この個人の身體組織とそれによつて與へられた他の自然に對する關係である。……すべての史的記述は、この自然的基礎及び人間の行爲による歷史の經過中における、

その變改から出發しなければならぬ。」而して、人間の生きるためには、就中食ひ、飲み、住ひ、着ることなどが第一の必要である。もしこのことをなし得ないとすれば、人間は何等「歴史を作る」ことは出來ない。故に人間の最初の歴史的行動は、これらの欲望の充足のための手段の製出、即ち物質的生活そのものの生産であつた。而して實にこの歴史的行動は、すべての歴史の根本條件であつて、數千年前も今日も尙ほ日と時とに、人間がその生命を維持するためには、充たされなければならぬところのものである。（註二九）

註二九　Marx, Deutsche Ideologie. I. Marx-Engels Archiv. I, S. 245.

人間は、かくの如き絶對的要求に從つて、自然に對するのである。何となれば、人間は生活手段を與へるものは、自然のみだからである。しかるに「人間は生産において、當に自然に對してのみ關係するのではない。彼等は一定の方法において共同に働き、彼等の活動を相互に交換することによつてのみ、生産する。生産するがためには、彼等は互に一定の連絡および關係を認容し、且つこれら社會的の連絡および關係においてのみ、自然に對する彼等の關係は成り立ち、生産が行はれる。」（註三〇）

註三〇　Marx, Lohnarbeit und Kapital, Kautskys Ausgabe. S. 25. マルクス、賃勞働と資本、河上肇譯、マルキシズム叢書第七册四六頁。

人間の歴史現象の認識を最もその根本にまで遡らうとするならば、この人間の生存なる事實を先づ認識しなければならぬ。筆者は嘗て書いたことがある。「吾々人間に對して、最も根本的事實は、吾々の生存なる事實である。吾々は事實として生存なる現象を否定することが出來ない。生存してゐる以上、吾々は生命を維持して行く何ものかを必要とする。生命維持のためには、何等かの狀態におけるエネルギイを必要とする。このエネルギイは各種の物質によつて、補給せらるゝのである。……人間が人間たる以上、食糧その他の生活資料なくして永くその生存を維持することを得ない。即ち人間に對しては、生活資料の獲得が生命維持に對して根本的事實である。この生命維持が何かの作用組織によつて、充たされるとすると、人は單に生命の維持のみで滿足しないで、自己の生存を有意義たらしめやうとする。即ち自己の生存を充實せしめやうとする。生存の充實は種々なる文化によつて充たされる。しかるに、人類の文化はその集團的生活の結果として

一代のみを以つて終るものではなくして、一代一代と集積せられるのである。文化の集積は文化集積の負擔者である人類の存續を前提とする。人間は生殖行爲によつて、自己の姿を次代に傳へるとともに、自己の屬する種族を保存する。故に人間の行爲を大別すると以上說明した、一、自己保存(自然的欲求の充足――文化の基礎)二、自己充實(文化の創造)三、自己延長(又は種族保存――文化の集積)の三つであるといふことが出來やう。この三つの行爲は要するに生命の維持、發展、繼續に他ならぬのである。」(註三一)

註三一　拙著、社會學概論、一五四――一五五頁。

かくの如くして、マルクスの史的唯物論の出發點は、社會學的に見て、最も妥當なる見地に立つものといはねばならぬ。他の如何なる概念をもつて、その出發點とする社會學的見地が存在するとしても、その概念の窮極の基礎は、この問題に來らざるを得ないのである。史的唯物論が、幾多の批判の嵐の中にあつて、よくその科學的性質を維持し得るのは、その出發點の人間に對して、最も根本的な事實を把握してゐることによるのである。

六

人間の、生存並に生存維持のための活動に人間の社會はその基礎を置く。「人類は、彼等の生活の社會的生產において、一定の、必要の、彼等の意志より獨立せる關係を、即ち、彼等の物質的生產力のある一定の發展階段に適應するところの諸々の生產關係を與へられたものとして受取る。」(註三二)「かくて各個人がそのうちにおいて生產するところの社會關係、即ち社會的生產關係は、物質的生產手段の、從て生產力の變動および發展とともに變化する。これらの生產諸關係は、その總和において、社會關係、または社會と名づけられるところのものを構成し、且つ實に一定の、歷史的の、發展階段における一の社會を、即ち固有の、特殊の性質を有する一の社會を構成する。」(註三三)

註三二　マルクス、經濟學批判、序言、宮川實譯四頁。

註三三　Marx, Lohnarbeit u. Kapital. S. 25. 賃勞働と資本、河上肇譯、四六――四七頁。

現實的な個人をもつて、その研究の出發點としたマルクスの立場は、孤立的自然人の概念を排斥するものである。「スミスおよびリカアドオがそれを以て始めた

ところの、かの離群索居の獵夫や漁夫は、十八世紀の創意力に乏しき幻想に屬する。」（註三四）「我々が歴史を遠く遡れば遡るほど、個人は、從つてまた生産する個人は非獨立的な、一のより大なる全體に屬してゐるものとして、現はれる。最初には尙ほ全く自然的な方法で、家族に、および種族にまで擴大されたる家族に、後には、種族の對立と融合とから生じたる種々なる形態の共同團體に。……人間は最も言葉通りの意味において社會的動物である。たゞに社會的動物であるのみならず、社會においてのみ個別化し得る動物である。社會の外部における孤立せる個人の生産といふことは、――それは稀には、文明人が偶然に荒野に迷ひ込んだ場合に起り得るのであるが、かゝる文明人は既に種々の社會力を能動的に有してゐる――共に生活し共に語る個人なくしての言語の發展といふに等しく、一の背理である。」（註三五）

註三四　マルクス、經濟學批判、序說宮川實譯三頁。

註三五　經濟學批判序說、四―五頁。

孤立的自然人の假定は、社會の構成に關する自然法學說の重要な前提であつて、この說の代表的主張者ホッブス、ロック、ルッソウともに、この假定の上にその理論を建設したのである。マルクスは、この說をもつて「十八世紀の創意力に乏しい幻想」としてゐるのであるが、近世社會學成立史上における學的努力は、この假定を打破するにあつて、實に第十八世紀の、主としてその後半におけるイギリス社會學者のこれに參加したことは社會學史上明かな事實である。（註三六）孤立的自然人否定の傾向は、社會學的思想の上においては、第十九世紀に入つて益々大となつたのであつて、今日にあつては、如何なる社會學體系もその出發點をこゝに求めるものはないといつて差支ない。

註三六　拙著、近世社會學成立史第三篇參照。

マルクスの社會學的出發點が生ける個人、從つて社會における個人を前提とすることは、論理的にいつても、また歴史的にいつても、何等の誤謬でないのみか、最も妥當な出發點であるといはねばならぬ。而して、この出發點こそ、經濟的生産の社會性、從つて、社會學的法則として史的唯物論を可能ならしめるのである。

マルクスは、生産關係としての社會をもつとも基礎的なもの、人間の生活における

る下部構造として、上部構造のよつて立つ基礎的事實としたのである。「これらの生產關係の總和は、その社會の經濟的構造、即ち法制上の及び政治上の上層建築がその上に立ち、一定の社會的意識形態がそれに適應するところの、現實の土臺をなす。物質的生活資料の生產方法は、社會的の、政治的の、及び精神的の生活過程一般を條件づける。人類の意識が彼等の存在を定めるのではなくて、寧ろその反對に、人類の社會的存在が彼等の意識を定めるのである。」（註三七）

註三七　マルクス、經濟學批判序言四頁。

社會的存在と意識の關係についてのマルクスの見解は、この引用によつて示さるゝ通りであるが、この點に關しては、論爭が甚だ多い。生產關係の總和たる社會の經濟的構造が社會的、政治的、精神的生活過程一般を條件づけるとは如何なる意味であるか。この問題に對する所謂唯物的見解は、屢々誤解または誤用されてゐる。エンゲルスはいふ。「一體『唯物的』といふ言葉を、ドイツの多くの若い著述家達は單なる口頭禪に使ふ嫌がある、即ち深い研究はしないで、何でもかでも唯物的にしてしまう、言葉を換へていふならば、それは唯物的だといつて、それで問題を解決したつもりでゐる。だが吾々の歷史觀は、何よりも先づ研究に際しての手引であつて、似而非ヘエゲル主義者流の徒らな體系構成の具では決してない。全歷史は新たに研究されねばならぬ。それがためには、吾々は各種社會形態の存在諸條件を一々について、探究しなければならぬ。さうした上で始めて吾々はそれらに照應する政治的、私法的、審美的、哲學的、宗教的等の種々の見方を、それらに基いて、導き出すことができるのである。」（註三八）

註三八　「シュミットに與へたエンゲルスの手紙」、久留間鮫造譯一二頁。

しからば、史的唯物論の眞意はどこにあつたか。晩年のエンゲルスは、種々の機會にこのことを說明してゐる。例へば、一八九〇年から一八九四年までに書かれたブロッホ、シュタルケンベルヒ宛の書翰の如きはその著しい例である。エンゲルスは、こゝに史的唯物論の根本主張を說明していつてゐる。

「唯物史觀によれば、歷史における窮極の決定要素は、實際生命の生產及び再生產である。マルクスも余もこれ以上の主張をしたことがない。もし何人か、經濟的要素をもつて、唯一の要素と盲信するものがあれば、彼は、唯物史觀の命題を

無意味な抽象的の荒唐無稽な言辭としてしまつたものである。經濟狀態は基礎である。しかし、他の種々なる上層建築の要素――即ち階級闘爭の政治的形態及びその結果、戰勝後、戰勝階級によつて定められる〻憲法、法律形態、及びこれらの現實的闘爭の反映として、參加者の頭腦に生ずる政治的、法律的、哲學的諸學說、宗教觀およびその教義體系への發達――は歷史的階級闘爭の過程に影響を及ぼし、多くの場合、その形態を決定する。それはこれらすべての要素の相互作用である。而して、この相互作用の內に無數の偶然を通じて最後に經濟的運動が必然的なるものとして成就せられるのである。……

「吾々は、吾々の歷史を自ら作る。しかし、それは非常に限定せられた前提と條件の下において、である。これらの中、經濟的なるものが、窮極の決定者である。しかし、政治的條件、その他人間の頭腦中に往來する傳說の如きも、決定的のものではないが、一の役割を演ずる。」（註三九）

註三九　Die Briefe von Friedrich Engels über den Geltungsbereich der materialistischen Geschichtsauffassung. Dokumente des Sozialismus. II, Ss. 71-72.

シュタルケンベルヒ宛の書翰の中には次のやうに述べてゐる。

「政治的、法律的、哲學的、宗教的、文學的、藝術的發達は、經濟的發達に依存する。しかしこれらすべては、相互に、及び經濟的基礎に反作用をなす。經濟的狀態が單一能動的原因で、他のすべては、單に受動的作用をなすといふのではない。窮極において、常に成就せらるゝ經濟的必然性の基礎の上での相互作用である。……：それは、人々が便宜的に考へてゐるやうに、經濟狀態の獨立的作用ではない。人間は自らその歷史を作る。たゞ既存の人間を條件づける環境、即ち既有の實際的の關係を基礎としてのみである。この諸關係中經濟關係――それはまた他の政治的並に觀念的關係によつて非常に影響せらるゝのであらうが――窮極において決定的なものである。これがこの說の要領である。」（註四〇）

上層建築と下層建築との關係に關する理論は、前揭「シュミットに與へたエンゲルスの手紙」の中でなほ詳細に論ぜられてゐる。この立場は、彼等の唯物論が機械論的唯物論でない當然の歸結であるといはねばならぬ。（註四一）

註四〇　Dokumente des Sozialismus. II. S. 74.

註四一　筆者は一九二六年「唯物史觀とエンゲルス」（社會科學、唯物史觀研究號）なる一文を草したことがある。この中で以上引用された書翰をもつて、エンゲルスの唯物史觀の變改とするベルンシュタイン、フォアレンダアの見解に贊成した。今日筆者はこの見解を採らない。その理由は、本文によつて明かであると思ふ。この點について、筆者の當時の見解に關說せられ、その誤謬を明かにした波多野鼎氏に深謝する。同氏著、新カント派社會主義昭和三年版、三一頁參照。

七

「社會の物質的生產力はその發達のある一定の階段において、從來それがその內に活動してゐたところの現存の生產關係、或はたゞその法的表現に過ぎざるところの所有關係と衝突するに至る。これらの關係は生產力の發展形態からその桎梏と變ずる。その時に社會革命の時代が到來する。經濟的基礎の變動するにつれて、巨大なる上層建築のすべては、或は徐々に或は急速に變革する。」（註四二）

註四二　マルクス經濟學批判序文四頁。

この主張は下部構造と上部構造との關係を、既に述べたやうに解釋するとき、それから必然的に導き出される歸結である。しかしながら、マルクスは、この社會的變革の物質的條件として、生產力の發展を擧げてゐる。曰く、「ある社會組織は、その社會組織のもとで發展した生產諸力に對し、その社會組織が狹ますぎるやうにならぬ以前には、決して、滅亡するものでなく、また新たなより高度の生產關係は、その物質的存在條件が舊社會自體の母胎內において、孵化しうるまでは、決して、舊社會組織にとつて代るものではない。」（註四三）

註四三　經濟學批判序言。

この命題は、矛盾の要素の發展による社會組織の崩壞に關する理論である。人間の生存そのものが、既に述べたやうに、孤立的なものでなくして、集團的のものであり、且つこの集團を形成する諸個人の有する物質的欲望が常に增大反覆して、その欲望の充足は集團生活內において始めて可能であるとすれば、この集團は統一であると同時に分化でなければならぬ。諸個人が自他のための相互作用を行ふといふ點において統一的であり、各自その任務を遂行するといふ點においては、分化的である。故にこの集團には統一的過程と分化的過程とが存在するといひ得

る。この統一的過程と分化的過程とが、調和の狀態にあるとき社會は平和的狀態にある。しかるに、社會の分化的過程は、主として、生產方面において現はれるが故に、一社會の最も根本的なる方面を形成するものといつて差支ない。この生產力の發展は從つて、社會の統一的過程をも動かすに至るのである。統一體としての原始共產制の社會は、この分化過程の發展によつて崩壞し、この分化過程は單なる生產技術上におけるそれから、社會組織における階級にまで轉化したのである。階級社會における分化過程は階級化として現はれてゐる。階級が一の生產に關係ある社會的區分たることは、この根據から明かである。かくて、この生產によつて規制せられる階級化は、生產に對する異れる利害關係を構成する。かくて、歷史的現象中最も社會にとつて、重大な意味を有するものは、この關係によつて定められるのである。從來の少くとも土地共有制崩壞以後の社會の歷史は階級鬪爭の歷史であると（註四四）論斷することは、この意味において正しいのである。

註四四　Das kommunistische Manifest.

この見地から、いへば、階級の消滅とともに、唯物史觀の理論の適用が消滅するといふやうな考へも維持し得ないことになる。何となれば、階級鬪爭は、社會分化過程の一下位概念であつて、社會の存在するところ、社會分化の終焉することがないからである。この意味において社會的變革に對する辨證法的見地は、正當であるといはねばならぬ。

一社會組織の必然的崩壞に關して一言することを要する。筆者は「ある社會組織は、その社會組織の下で、發展した生產諸力に對し、その社會組織が狹ますぎるやうにならぬ以前には決して滅亡するものでない」といふ文章を引用して置いた。この文章は河上肇氏の改譯によるものである。（註四五）　この文章は「生產力がその組織の許す限り發展してからでなくては云々」（宮川譯）とされてゐたものであつた。このために、マルクス主義は機械論的定命論的に見られてゐたのである。マルクス主義は、社會法則の自然法則と異れる點を認識した上においての社會科學である。この譯文の改譯はマルクス解釋學上における一貢獻といはねばならぬ。

註四五　河上肇著、マルクス主義經濟學の基礎理論二二五頁以下。

この解釋によつて、史的唯物論の立場によつて、ロシア革命などの問題を解決し

得ると同時に、マルクスの見地が、經濟的定命論でないことを示し得るのである。例へば、レエニンが、革命後のロシアにおいてさへ、(一)高度に自然經濟である家長的農民經濟、(二)商品小經濟（パンを販賣する多數の農民はこれに屬す）(三)私經濟的資本主義、(四)國家資本主義、(五)社會主義の五形態の經濟を指摘してゐるのであるが、（註四六）かくの如き狀態の社會においても、社會主義への推移の可能性を語るものである。

註四六　N. Lenin, Die Vorbedingungen und die Bedeutung der neuen Politik Sowjet-Russland. (über die Naturalsteuer) Kleine Bibliothek der russischen Korrespondenz Nr. 47-48. 1921. S. 6.

八

史的唯物論に關する屢々向けられる批難は目的的行爲とこの史觀の關係である。吾々はその代表者としてシュタムラアを擧げることが出來る。「もし現實に、すべての社會的思惟、判斷、及び意欲がすべての獨自性を有することなく、經濟關係とともに、成立し、發達し、消滅するが如き方法において、經濟的沃地に依存するといふ意味で、經濟諸關係の反映に過ぎないとするものならば、不可避的に進み行く經濟的諸關係を『人』がこれによつて、指導せんとする人間の目的を取扱ふ如きは無意味である。これに反して、もし、經濟的發展の自然法則的行程が人によつて彼等の目的に向けられ、指導されねばならぬならば、そして、何人かがそれを可能として、それに努力するならば、彼は、人間存在に關する徹底的唯物的根本見解を拋棄したことになる。彼は自然現象の因果性の外に、目的の思想を採り入れてゐる。」（註四七）

註四七　Rudolf Stammler, Recht und Wirtschaft nach materialistischer Geschichtsauffassung. 1921. S. 430.

しかるに、シュタムラアによれば、自然必然的なるマルクス主義は、他方において、社會主義運動を主張してゐる。この事實は、彼によれば明かに矛盾である。もし社會的發展が既に自然必然性によつて行はれるならば、それを自覺して助長しようとすることは意味をなさない。シュタムラアによれば、ある現象を必然的即ち不可避的なりと認めるときは、この現象に關しては、意欲及び決意は一般に採り得ないである。あるひは、ある活働は意欲された結果の到來のために必要であるとするならば、そのときは最早必然といふことは出來ないのである。（註四八）

註四八　Stammler, Recht u. Wirtschaft. Ss. 415 ff.

小泉教授の史的唯物論批判の一節もこの立場に立つてゐる。「マルクス、エングルスは『共産黨宣言』を結んで『萬國のプロレタリエルよ、團結せよ』といつて居る。既に『團結せよ』といふからには、斯くすることが價値ある或目的を成就するための適當の手段たることを認めてゐるのでなくてはならぬ。『團結』の結果として得らるゝものが價値なきものであるならば、其爲めに『團結せよ』といふことは無意義である。團結すると否とに拘らず、或狀態が實現せらるゝものならば『團結せよ』といふことは、同じく無意義である。即ち此場合社會主義者にとつての問題は、正しき目的に對する正しき手段如何の問題であつて、是に對する答へは、倫理的確信に基づくものでなくてはならないのである。而して、若しも其答が倫理的確信に基づくものであるならば、社會主義の到來は必然ではない。資本主義の發達は必然的にプロレタリエルの團結の努力を喚び起こし、此努力が必然的に社會主義を成就せしめるといふやうに說いても、矢張り難關は通過されてゐない。若しも、此の因果の連鎖が絕對的に動かすべからざる、唯一の可能なる連鎖であるならば、社會運動は同じく無意義である。若しさうであるならば、『萬國のプロレタリエルよ、

團結せよ』といふことは、それこそ、『旭日よ、昇れ、』『四季よ、循れ』といふに類するものであらう。プロレタリエルは必ず團結する、故に『プロレタリエルよ團結せよ』といふのは無意義である。」（註四九）

註四九　小泉信三著、マルクシズムとボルシェヰズム五――六頁。

この批判に答へるためには、マルクス、エングルスが如何に社會における必然性を見たかといふ點と、歷史における理想の要素を如何に取扱かつたかを明にすればよい。この二つの問題についてエングルスは次のやうにいつてゐるのである。少しく長いが重要の點であるから、その全部を引用する。

「しかるに社會の發達史は、或一つの點において、自然の發達史と本質的に異るものたることを示してゐる。自然において、相互にはたらきかけるものは――自然に對する人間の反作用を度外視すれば――意識のない純盲目的能因であつて、そういふ能因の交互作用の中に一般法則がはたらいてゐるのである。發生する一切の出來事のうち、何一つとして意欲された意識的目的として現はれてくるものはない。これに反して、社會の歷史においては、行動してゐるもの

は、意識を賦與され、反省または情熱を以て行動し、一定の目的に向つて働らく人間である。意識された意圖意欲された目標なしのものは、何一つとして發生しないのである。しかしこういふ差別は歴史的研究殊に個々の時代と事件の歴史的研究にとつては重要なものではあるが、歴史の經過は内面的な一般法則によつて支配されるといふ事實には變りがないのである。とはいへ、この場合に、各個人によつて意識的に意欲された目標に反して、表面の上では大體偶然が支配してゐるように見える。意欲された通りのものが現はれることは、極く稀れであつて、大多數の場合は、意欲された數多の目的が交錯し反撥するか、それとも、これらの目的そのものが始めから實現不可能のものであるか、乃至實現の手段の不充分であるか、いづれかである。このやうに歴史の領域における無數の個人意志並びに個人行爲の衝突は、無意識的自然界を支配してゐる狀態と全然類似した狀態を現出する。……各人が自己の意識的に意欲した目的を追求することによつて、人類は善かれ惡かれ、自己の歴史をつくる。そして、種々の方面にはたらくこの多數の意志と並びに外界に對するこれらの意志の多種多樣の作用との結果が、取りも直さず、歴史なのである。されば歸するところ、多數の個人が何を意欲してゐるかにある。ところがまた熱情や反省を直接に規定する槓杆の種類は極めて多數なる樣である。この槓杆は、一部は外界の對象であり得るも、一部は觀念的動因、即ち名譽心『眞理と正義とに對する感奮』人身的憎惡、乃至はまたあらゆる種類の純個人的な妄想であり得る。しかしながら一方において、歴史の中に活働してゐる數多の個人意志は大多數の場合、意欲されたものとは全然違つた結果、――往々それとは正反對の結果――を生ずるものであつて、從つて個人意志の動因は如何なる場合も、總體的結果に對しては、從屬的な意義しかもつてゐないことは、すでに吾々の見た通りである。」（註五〇）

註五〇　Engels, Feuerbach. Ss. 55-57. エンゲルス、フォイエルバッハ論一二二――一二六頁。

この目的論と因果論との關係は、マックス・アドラアによつて、より詳細に理論的に論ぜられてゐる。アドラアのシュタムラア批判は、哲學的であつて稍難解のものではあるが、その中に、マルクスが第一インタナショナルの創立宣言中に「勞働者階級は實現すべき何等の理想を持つてゐない。勞働者階級はたゞ既に崩壞しつ

「あるブルジョア社會の胎内において發展してゐる新社會の要素を自由にすればよいのである」といつた言葉を解釋してゐるのが、恰度この場合の同答になるのである。

彼はそこで次の意味のことを主張してゐる。文化生活の發展において、出現し來る理想の歴史的事實および作用が拒否されたのでないことは自明である。史的唯物論は、勞働者階級の理想に、一指をも觸れるものではない。勞働者階級が實現すべき何等の理想を持たぬといふ場合に、それは勞働者の中で作用しつゝある理想の事實を拒否するのではない。それを因果考察の領域内に秩序立て、自覺された發展必然性としての理想を、勞働者階級の社會的行動の指導概念とするといふ新らしい立場を現はすのである。それは、勞働者階級の理想的努力を因果的に説明し、それの發生根據と發展必然性とを示すことよりて、實踐的には、獲得せられた洞見を通じて、理想として强固にするところのものを、理論的には理想として消滅せしめるのである。即ち勞働者階級の直接的政治的行動においては、相變らず、理想として止まるのであるが、理論的立場においては、それが問題となるのである。

そして、理想は、それの實現の必然的歴史的過程の認識の中に解消することによつて、この理論の成果を同時に認識するところの實踐的政治的立場にとつては、强固な理想となるといふにある。（註五一）

註五一　Max Adler, Marxistische Probleme Ss. 247-248.

もし、かくの如き解釋を與へて、初めて、社會科學としての唯物史觀が成立するのであつて、一方においては、必然性を他方においては、理想を個別に叫んでゐたとするのは、マルクスの如き統一的思想家にとつて、あり得ざるところでなくてはならぬ。シュタムラアの批判は、この意味で、マルクスに對する無理解な、少くとも、同情のない批判といはねばならぬと思ふ。（註五二）

註五二　シュタムラアのマルクス批判に對しては、プレハノフも闘説してゐる。同著マルクス主義の根本問題、恒藤恭譯一五七――一六八頁。

九

しからば、史的唯物論は社會科學において如何なる地位を占むべきであるか。

エンゲルスは、科學を三種に分つた。第一は、無機界を對象とし、數學、天文學、物理學、

化學等を包含する。第二は、生命ある有機物の研究を含むものである。第三は、人間の生存條件、社會關係、法律及び國家形式並にその觀念的な上層建築たる哲學、宗教、藝術等を歴史的繼起と現在の結果とに亘つて、研究する歴史的諸科學である。（註五三）從つて、史的唯物論がこの第三類に入るべきことは、何等の疑ひもない。マルクス、エンゲルスは、普通、例へば「ドイチッエ・イデオロギイ」においてなしたやうに、科學を自然科學と社會科學とに分つてゐる。以上の三分類において、前二者は自然科學で、第三は社會科學である。史的唯物論がこの範疇に入るべきことについては、何等の疑問がない。

（註五三）反デュウリング論、林、河野譯、一二七——一三一頁。

しかるに、この社會科學は二つの意義を有する。その一つは、社會諸科學の意味における名稱である。經濟學、法律學、政治學、歴史學等を包攝する意味における個別的科學である。マルクスは、これらの内最も經濟學を重要視した。それは、經濟學が、市民的社會の根本事實である資本制生産の自然律を問題にするからである。（註五四）しかしながら、マルクス主義は、法律學、政治學等の可能性を否定するものではない。たゞこれらの取扱ふ現象の相互關聯について一の立場、即ち史的唯物論を有するに過ぎないのである。

（註五四）資本論第一卷第二版序文。

マルクスは、この史的唯物論的立場に從つて、これらの社會諸現象の關係を決定せんとしたのである。既に繰り返していつたやうに、社會的生産がすべてのものの基礎である。この基礎に立つてのみ、例へば法律、國家、その他のイデオロギイを說明することが出來るのである。從つて史的唯物論は社會諸科學に對して、一の基礎的科學であるといふことが出來る。これらの社會諸現象の行はるゝ基礎的事實を解明し、この基礎的事實とその上層建築との關係を規定するものが史的唯物論である。

故に、史的唯物論は、社會諸科學に對して一の上位科學たる地位を保持する。從來社會學は一の綜合的上位科學としての存在權を主張したのであるが、形式社會學、殊にジンメル、ヴィヤカントなどの攻擊に遭遇した。（註五五）形式社會學者の非難の標的となつたものは、何等の聯絡もなく、漠然と社會諸科學の研究の成果を攝

取し、これに社會學なる名稱を附したものに外ならない。それ故に形式社會學者はそれを一の蒐集科學であり、レッテル科學であるとするのである。

註五五　Simmel, Soziologie, Vierkandt, Gesellschaftslehre. を見よ。

史的唯物論は、この意味の綜合社會學ではない。史的唯物論は、社會諸科學が個別的にその各々の觀察點から論ずる諸現象間の相互關係とその社會關係における重要性を決定せんとするものである。それは、社會諸科學の研究の成果を利用するものであるが、それを單に配列せしめた所謂綜合社會學ではないのである。否、かくの如き配列的方法を史的唯物論は排斥して、社會現象において、何が最も根本的であるかを探究し、この根本的なものと爾餘の社會現象が如何なる關係にあるかを、決定しようとするものである。かくの如き地位にあるが故に、吾々はプレハノフとともに次のやうにいふことが出來るのである。「史的唯物論は科學として成立し得るあらゆる將來の社會學に對して序論を成すものである」と。（註五六）

註五六　プレハノフ、マルクス主義の根本問題一一〇頁、この最後の問題については、尙ほ杉山榮氏の「社會科學十二講」を見よ。「社會科學十二講」はマルクス社會學の體系化の我が國における最初の試みであつて、その博大なるマルクス文獻の利用と理解とは、マルクス社會學の何ものたるかを吾々に理解し易からしめる。殊に、その所說が單にマルクス的文獻のみに限定せられず、一般の社會學的範圍にまで行き涉つてゐることは敬服に値する。なほ、その第五講までに至る所論は、マルクス社會學の方法論的基礎づけの意味のみではなくても、一般社會學研究のために必讀すべき大文字である。マルクスを顧みることと最も少きわが社會學界は僅かにこの書によつて、マルクス研究に參加してゐるのみである。著者の自重を祈る。

（附記）史的唯物論については、尙ほ述べなければならぬ多くの問題を有してゐる。たゞ本論文は、筆者のマルクス社會學研究の手引きとして草されたものので、既に種々の機會に發表したマルクス社會學に關する諸篇並に今後發表せんとする論稿に對する序論として草せられたものである。これらの諸篇を參照して下されば幸甚である。一九三〇・一〇・一五。